

# 令和4年度 上田市立 浦里小学校 自己評価シート（最終報告）

学校教育目標	めざす子どもの姿（中期的目標）	総合評価			
<b>自分のよさを切り拓く子ども</b> ①進んで勉強しよう ②思いやりのある人になろう ③丈夫な心と体をつくらう ④ふるさと（浦里）に学ぼう	<b>自ら気づき 問いかけ（考え）</b> やってみる 子ども	・子ども主体の学びとなるように、めざす子どもの姿を「自ら気づき 問いかけ（考え） やってみる 子ども」として1年間行ってきた。本年度設定した「子どもと関わる時間」に、教職員が子どもの姿を知ろうと努め、子どもの気づきや問いを生かした授業となるように心がけてきた。特に生活科や総合的な学習の時間を中心に子どもの探究的な学びを保障し、その結果、問いを解決しようと協力して取り組む主体的な姿が見られたことは成果としてあげられる。協働的な学習過程で、自他の良さや知らなかった一面に気づくことが、本校の教育目標「自分のよさを切り拓く子ども」の達成につながっていくと考える。 ・ふるさと学習発表会では、地域を題材とした探究的な学びの発表ができ、保護者や地域の方からも良い評価をいただいた。これからも、保護者や地域の方に本校が目指す学びの姿をお伝えして理解を得ていきたいと考えている。生活科や総合的な学習の時間だけでなく、様々な教科・領域で、子どもが主体的に学ぶ学校の在り方を追究していく。			
	今年度の重点目標		評価	成果と課題	改善策・向上策
	①	子ども理解に基づく授業構想～個別最適な学び～	B	一人一人の子どもを知り、授業づくりや支援につなげた事例が増えている。その成果が児童へのアンケート結果にも表れている。	意識は高まっているが、一人一人の学び方の特徴に応じた支援や教材について、検討していくことが必要。連学年会を機能させて検討する。
	②	自他のよさを認め合う場面の位置づけ	B	「考えを聞き合う場面を大切にしたい」と自覚している児童が全校の90%を超えたことは大きな成果である。しかし毎月取っているアンケートでは、自分のよさを自覚できていない子どもたちがおり、3学期に入ってもその傾向に変わりはなく心配である。人から認められる、頼りにされるなどの場面を、子どもが自覚できるように設定する必要がある。	学校の教育活動のすべてで人権教育を行うことを意識し、一人一人の違いやよさを認め合う学習を継続的に行う。
	③	運動・遊びの日常化	B	異年齢や教職員と一緒に遊んだり体を動かしたりすることを楽しみにする子どもたちが増えてきた。	体育係、児童会にはたらしかけて、子どもたちがもっと遊びたくなるような仕掛けを考えていく。
④	子どもの気づきや願いを基にした探究的な学び	A	子どもたちの気づきや願い、興味関心から学びがスタートできるように意識する教員が増え、子どもたちも達成感を感じる場面がみられる。	教職員の意識をさらに高める共に、保護者や地域にも、探究的に学ぶよさについて発信し、協力していただけるようにする。	

○ 評価基準 A・・・達成できた B・・・おおむね達成できた C・・・やや達成できなかった D・・・達成できなかった

領域	対象	評価項目	評価の観点	評価	成果と課題	改善策・向上策
重点目標	①	子どもの実態把握	子どもと関わる時間、授業の評価、各種アセスメント等をもとに、一人一人の興味関心、願い、支援の方向などについて、把握したか。	A	「先生はあなたのいいところを認めてくれていますか」という質問に、全校児童の92%以上が「そう思う」「大体そう思う」と感じている。「子どもと関わる時間」をはじめ、様々な場面での子どもの姿から、興味・関心・願いを把握しようと努めたことの成果と感じている。	子どもと関わる時間や授業での様子の中から、子どもの願いや興味関心などを連学年会などで共有できるように話しあう機会を設け、好事例を全職員に広めたり、職員共通のフォルダ内で紹介したりしていく。
		三観点を意識した授業	「子どもの言葉で疑問形の学習問題」「振り返りの位置づけ」などを行い、一時間の流れがわかる板書をしているか。	A	意識する教員は増え、児童も90%以上が授業の初めに目標が示されていると答えている。「どの授業でも」という状況に至ることを目指していく。	「学習問題」「学習課題」「振り返り」のマグネットシートを使い、構造的な板書となるよう意識していく。
		個別最適な学び	一人一人の学び方の個性を生かしたり、合理的な配慮に基づいたりした学習を保障しているか。	B	一人一人の学び方の特性を理解することに努め、学習過程を自分で選択できるようにしたり、校内の人的・環境的資源を生かして支援体制を組んだりした。	問題解決の見通しをもつ場面を大切に、自分自身にあったやり方や表現の仕方を選択できるようにする。
	②	異年齢の友だちとの活動	縦割り班、連学年授業、連学年担任制、こまゆみ教室、保育園との交流などを通して、相手を思いやる意識を高める場面が設定できたか。	A	連学年授業で、お互いに考えを伝え合ったり、協力して課題を解決したりする場面を設定したことで、活動に達成感を感じる姿が見られた。	児童会活動が子どもたち主体のものになるように、学校生活の中で委ねられる場面を位置付けていく。来年度の150周年記念行事にも児童会が積極的に関わられるよう、働きかけを行っていく。
		コミュニケーション能力の育成	ICT授業や連学年授業を充実させ、友だちと関わり、学び合う場面が位置付いた授業が行われていたか	B	1学期はコロナ禍で友だちとの学び合う場面に制限がかかることもあったが、担任は多くの授業で、考えを聞き合う場面を大切にしていた。そう感じる児童が、1学期80%台後半から2学期は90%台と増えた。休み時間などでのコミュニケーションの行き違いからトラブルが生まれることは、継続していくべき課題である。	対人関係スキルやコミュニケーション能力の育成につながるレクリエーションなどを、校内で共有していく。
	③	体力づくり・遊びなどの日常化	マラソン、体みがき、休み時間の遊びなどの場面で、子どもたちが自分から体を動かすよさを感じるようにはたらきかけたか。	B	休み時間に、学年を超えてサッカー・ドッジボール・鬼ごっこ、冬は雪遊びなどで体を動かすことを楽しみにしている児童が増えた。11月のマラソン大会に向け、全校児童が走る姿が見られたが、その後の朝のマラソンの取り組みには個人差が見られる。	運動に苦手さを感じている児童に対し、タイム以外の目標設定があることを伝えていく。職員も外に出られるときは一緒に出るようにする。
		健康増進への取り組み	歯科指導、栄養指導など、子どもたちが自身の健康に意識を向けるような学習を行ったか。	A	コロナ禍に対応しながら、学校歯科医や栄養士と連携し、歯科指導や栄養指導を実施した。	学校生活のいろいろな場面で、健康増進や疾病予防のためによいことを選択できるように指導していく。
	④	ふるさと学習の充実	地域の方と連携し、教科横断的なふるさと学習を実施できたか。	A	夏休みに地域理解の職員研修を行った。お助け隊の方と連携しながら、子どもたちが地域に触れて学習することができた。2月のふるさと学習発表会では、子どもたちが1年間地域から学んだことを発表することができた。	年間計画に位置づいている題材であっても、問題意識や願いに基づいた活動になるよう、題材との出会い方を研究していく。
		探究的な総合的な学習の時間に	生活科・総合的な学習の時間を、子どもたちの願いや気づきから組織し、探究的な学びを保障できたか。	A	子どもたちの気づきや問いを、生活科や総合的な学習の時間につなげた単元設定が増えている。	校内でも探究的な学びの具体例を紹介し合い、子どもたちがもった問いを探究できるための方策を共有する。来年度に向けて、3月から子どもたちの実態に応じて動いていく。
	学校運営	地域との連携	コミュニティー・スクール	授業や行事への参加を通して、学校運営に意見をいただき、その意見を教育活動の改善に生かしたか。	B	参観日や学校運営協議会での意見を反映し、教育活動を改善している。コロナ禍で以前行っていたような活動には制約があるため、アフターコロナに向けた工夫を考えていく必要がある。
PTA活動			コミュニティー・スクール実践目標のあいさつ・メディアとの関わりを重点に、学級懇談会で取り上げ、地域・家庭と連携して取り組むことができたか。	A	メディアコントロールや挨拶を推進するために、子育て委員会が中心となって働きかけを行った。学校保健委員会では、「体みがき」の講師から、子どもと一緒に体を動かせるよう学ぶことができた。	150周年記念行事に向けた組織づくりを、実行委員会と連携して推進していく。
研修		授業づくり研修	「（自ら）気づき 問いかけ（考え） やってみる」子どもを目指して、教科研究を行い、一人一人が授業改善を行ったか。	A	指導主事を招いての研究授業、各種研修会への参加等を通して、子どもが主体的に学ぶ授業の在り方について、理解を深めた。	お互いの授業を見合う中で、教師が教える学校から子どもが学ぶ学校のイメージを共有していく。
業務改善		働き方改革	学校業務を効率化したりチームで取り組んだりして、超過勤務を4月と比べて縮減できたか。	B	職員会議のペーパーレス化、校務支援システムを利用した情報伝達などを行っている。超過勤務の多い職員も見られ、健康のためにも、ワークライフバランスのためにも、改善が必要。	業務負担の多い職員の背景を分析し、校務分掌の見直しや、業務内容の精選を行っていく。